

「しゃべり手」としての人生を
全うするため、フリーランスに転身

山中秀樹氏

フジテレビアナウンサー → 同局ライツ開発局部長 → フリーランスアナウンサー



HIDEKI
YAMATAKA

1958年広島県生まれ。81年、早稲田大学第一文学部卒業後、フジテレビに入社。スポーツ記者を経て、報道リポーター、キャスター、バラエティ番組の司会などを幅広く経験。アナウンス室専任部長を経て、2006年6月、ライツ開発局に部長として異動。06年12月フジテレビ退社、07年1月よりフリーに。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 大久保幸夫、入倉由理子
Text = 入倉由理子 (56~58P)
大久保幸夫 (59P)
Photo = 鈴木慶子

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

2007年1月、山中秀樹氏は約26年間勤めたフジテレビを退職し、フリーとなった。「アナウンサー生活も20年を超え、プレーヤーから管理職の仕事にシフトしてきたころから、『しゃべり手』としての人生を全うしたいという思いを抑えがたくなり、退社・独立することを最終的に決断しました」というコメントを出している。

「生涯、一アナウンサー」。この言葉が、彼の職業観を象徴しており、また、そこには寸分のブレもない。

小学校時代に志を持ってから、 迷いなくアナウンサーへの道を邁進

山中氏は小学校低学年のときには、おぼろげながら「アナウンサー」への志を持っていたと振り返る。

「落ち着きのなくしゃべる子でね（笑）。先生に『しゃべる仕事に向いているのではないか』と言われたのが最初のきっかけだったと思います。高学年になって別の先生に『朗読がわかりやすく、うまい』と褒められたりした。小学校を卒業する頃には明確に『アナウンサーになる』と言っていました」

その後、広島の名門である中高一貫校、修道中学校・修道高校に進学した。偶然だったが、この学校は放送部に非常に力を入れていた。かつての上司であるフジテレビの福井謙二氏も、同校の先輩にあたる。変声期を過ぎた後は、ずっと発声練習を続けていた。

「アナウンサーになれるかもしれない」と思うようになったのは、高校2年生だった。全国高校生アナウンス大会・ラジオ番組部門で全国2位を獲得したのだ。

「この年は広島大会。広島代表の僕に花を持たせてくれたのかな（笑）。でも、普段、自分の実力を測る指標がないから、この受賞で自信が芽生えたのは事実です」

「アナウンサーになるなら早稲田」。大学も志の実現のために選び、1977年、早稲田大学第一文学部に入学。迷うことなくアナウンス研究会に入った。サークルの活動を続ける傍ら、ラジオ局でのアルバイトも経験した。最初はニッポン放送で、番組に来るハガキ整理。その後、文化放送のスポーツ部では川崎球場に詰めて、放送用の原稿作りのために、放送局にいるスタッフに向けて試合中の「実況」を送り続けるという「セミプロ」的な仕事も任された。この刺激的な経験が、山中氏が「現場の面白さ」に開眼したきっかけになったという。

山中秀樹氏 キャリアヒストリー

- 1958年 0歳 広島県広島市に生まれる
- 1965年 6歳 よく話す、活発な子どもだった。この頃、「アナウンサーになる」と初めて意識する
- 1971年 12歳 中高一貫校である修道中学校・修道高校に入学。放送部に入部
- 1975年 16歳 全国高校生アナウンス大会・ラジオ番組部門で全国2位を獲得
- 1977年 18歳 早稲田大学第一文学部入学。アナウンス研究会に所属
- 1981年 22歳 フジテレビにアナウンサーとして入社。スポーツ実況を経て、報道レポーターに
- 1983年 24歳 熊本の殺人未遂犯追跡報道で、FNSアナウンス大賞を受賞
- 1992年 33歳 『FNNスーパータイム』のキャスターとなる
- 2004年 45歳 管理職となり、徐々に現場に出る機会が減る
- 2006年 47歳 アナウンス室を離れ、ライツ開発局に異動。同時にフリーランスになることを決意
- 2007年 48歳 フリーランスのアナウンサーとして独立



フジテレビ入社当時。



38歳。現場の面白さは飽くことがなかった。



バラエティ番組でも活躍中。

そしてフジテレビに入社後、スポーツの実況を経て、報道番組のレポーターとなった。そのとき、「現場」へのこだわりが確固たるものとなる「事件」があった。

その現場で見たこと、感じたことを つぶさに伝える「しゃべる職人」でありたい

「殺人未遂事件のレポートで、容疑者の足跡を追って熊本の山中に入っていました。すると、止まっている車の中に容疑者がいたんです。相手は殺人未遂の容疑者だし、『逆上されたらどうしよう』と思うと怖かったけれど、自分の背中にカメラさんなどスタッフさんを背負っていると思うと、不思議と足を踏み出すことができ、容疑者に話しかけ、説得して一緒に下山しました。その模様を『おはよう！ ナイスデイ』で放送し、これがきっかけでFNSアナウンス大賞をいただいた。マイクを持つと人間変わっちゃう（笑）。恐怖や寒さのせいもあったと思いますが、震えがくるほどその現場の緊張感が面白かった」

思い返せば、フジテレビの入社試験でも、「なぜアナウンサーになりたいのか」と問われ、「事件や事故などの現場は舞台のようなもの。その舞台はすべての人が見ることはできない。その現場で見たこと、感じたことをつぶさに伝えられるのがアナウンサー」と答えたという。

「アナウンサーになってからずっと、そして今でもその気持ちは変わりません。僕は『しゃべる職人』なんです」

父も料理人であり、「その職人の血が流れているのではないか」と山中氏は言う。彼が職人という言葉を好んで使うのは、その言葉にある「高等な技術を持つプロ」というニュアンスに惹かれるからだ。その言葉に違わぬように、多くの現場の経験の中で、山中氏は高度な技術に磨きをかけていったのである。

ポジションが上がり現場を離れるほど モチベーションが下がっていく

しかし、山中氏はアナウンサーという職人であると同時に、会社員でもあった。年齢とキャリアを重ねて管理職となり、現場で話す機会は減っていった。

「ポジションが上になればなるほど、モチベーションが下がっていく。アナウンス室の専任部長は、デスクの仕事がメインなんですね。制作現場から『今日から1泊2日



で九州でロケがあるから、女性アナウンサーを1人』『グアムで1週間ロケなので、英語が堪能なアナウンサーを』。そうした要請に、ローテーションと適性を見てさばいていく。妻に『あなた、しゃべりたいんじゃないの?』と言われたこともありましたが。でも、部長だから仕方がない。そう思っていました」

現場で話したい気持ちはある。フリーになろうかと迷ったことも一度や二度ではなかったという。そうはいつでも「フリーで食べていけるか」という逡巡もあった。

ところが06年6月、状況は一変する。アナウンス室からライツ開発局への異動を言い渡されたのである。

「他の異動者よりも1日前に内示、『二階級特進』の昇進、会社がとても気を使ってくれたのもわかった。テレビ局の将来を考えればコンテンツの開拓を担うライツ開発局の重要性も理解できました。それでも、アナウンス室から離れることは受け入れられませんでした」

自宅に帰って、妻に相談した。すると、「自分で決めて。フリーになって仕事がなかったら、私が自転車に乗ってあなたを営業する」と背中を押してくれた。そして、07年1月、20年来の知人「爆笑問題」の所属事務所タイタンに移籍し、フリーとして第一歩を踏み出した。

現在はアナウンサーとしての仕事のみならず、バラエティ番組などで活躍の場を広げている。

「自分に対して『まだまだだな』と思う。だからこそ人の評価は大切です。バラエティをやらせてみよう、報道番組をやらせてみようとするのは、僕ではなくて僕の仕事ぶりを見る制作側であり、視聴者の方々です。フリーだからこそ、チャンスがあればチャレンジします。でも、もちろん、今でも『生涯、一アナウンサー』ですよ」

■ 山中秀樹氏のキャリアをこう見る

他部署への人事異動が促した 「生涯、一アナウンサー」への再決意

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

山中氏は、小学校の卒業文集ですでに将来アナウンサーになりたいと書いている。アナウンサーになりやすい大学を選び、アナウンサーに絞って就職活動を行い、50歳になる現在まで一貫してアナウンサーとして仕事をしている。その間、一度も他の職業に心が動いたことがないという。ビジネス界では極めて異例なキャリアである。

組織心理学研究者であるドライバー（M. J. Driver）氏によれば、キャリアには個人が認知する一定のパターンがあるという。彼は、複数の企業のビジネスエグゼクティブと専門職を調査して、その結果を4つに分類し、キャリア・コンセプトと名付けた。①一生を通じてひとつの職業を続ける（Steady State）②一貫して明確に定義されたはしごを昇り続ける（Linear）③10年程度の異なる仕事をつなぎあわせてゆく（Spiral）④1～4年程度で様々な分野の仕事をわたり歩く（Transitory）、である。

山中氏はまさしく①の典型であり、このようなキャリア・コンセプトにはビジネスパーソンの実に50%が共感することがわかっている（ワーキングパーソン調査2000）。しかし現実には山中氏のように一本の道を歩み続ける人は稀であり、このような事例があることは、多くの人に夢と爽快感を与えるのではないだろうか。

アナウンサーを25年経験したときに二階級特進というおまけつきで知財担当の部長に異動するが、それからしばらくの期間に「やはりア

ナウンサーを続けたい。そのためにフリーになる」という決断をする。サラリーマンに異動はつきものであるが、結果的にはこの異動が山中氏のキャリアを活性化させたように思えてならない。一時的に現場を離れることによって、自らの指向を再確認するという効果と、客観的にアナウンサーという仕事を見つめることで成長を促すという効果があったのではないだろうか。生涯ひとつの仕事をやりに続けるためには、一時的にその場を離れることはむしろプラスに作用するものなのである。

フリーになって、仕事は自分が決めるのではなく、視聴者や制作者が「山中にこれをやらせてみたい」と考えて決めるものだと考えるようになったという。厳密に定義されたアナウンサーという仕事から、「しゃべりの職人」という抽象度の高い一步上の世界へ、これから活躍の場を広げていくことになるのだろう。

